

メンタル・スペース理論と認知言語学

酒井 智宏

キーワード: メンタル・スペース理論 認知言語学 定義 説明 認知的構築

要旨

この論文の目的は、メンタル・スペース理論が、表面上は認知言語学の理論の一つであるとされながら、実際には認知言語学者によって敬遠され、認知言語学の概説においても取りあげられることが少ない原因を明らかにすることである。メンタル・スペース理論の主たる研究対象は、自然言語そのものではなく、自然言語を手がかりにして作り出される認知的構築物である。この認知的構築物の構成要素であるメンタル・スペースは、定義が不明確で、明確に定義しようとするほど明確な定義から遠ざかるというジレンマを抱えている。また、この認知的構築物もつとされる性質や制約は、実はわれわれの自然言語に関する理解を密輸入したものであり、独立の根拠によって正当化されたものではない。これらの点で、メンタル・スペース理論の枠組みでの研究は、言語現象をよりよく理解されている認知過程によって直観的に分かりやすいやり方で説明するという標準的な認知言語学の研究手法とは大きくかけ離れている。これが、メンタル・スペース理論が認知言語学者によって敬遠される原因にほかならない。

1. はじめに

メンタル・スペース理論とは、Fauconnier (1985/1994) によって提唱された、自然言語における意味構築に関する理論である。一般に、意味の研究は、自然言語を形式言語との類似性のもとに捉えようとする形式意味論と、自然言語をヒトの世界認識の反映として捉えようとする認知意味論とに大分される。この二分法の中でのメンタル・スペース理論の位置づけに関しては、二つの正反対の立場が存在する。引用 1-3 に見られるように、白井 (1991) と三藤 (1999) がメンタル・スペース理論を形式意味論との親近性のもとに捉えているのに対して、杉本 (1998) はこれを形式意味論と対立する理論、すなわち認知意味論の一種として捉えている。

引用 1

日本でも、いわゆる、「メンタルスペース理論」[...]に共鳴して研究を行っている研究者ならば、状況意味論よりも、ディスコース表示理論に(近親的な)“親しみ”をい多くことであろう。本書でメンタルスペース理論を取り上げなかったのは“unfair”だと思われるかもしれないが、筆者は、自然言語の明示的な意味論研究としてディスコース表示理論を取り上げていけば、それで十分であると考えている。

(白井 1991: 261)

引用 2

メンタル・スペース理論は Fauconnier が G.Lakoff, R.Langacker, E.Sweetser ら、アメリカ西海岸における認知言語学の旗手たちとの緊密な連携のもとに研究を進めてきていることもあり、一般に、認知言語学の一部をなすものと受け取られている。実際、Fauconnier 自身が Fauconnier (1985) の新版[= Fauconnier (1994)]出版に際して新たに書き加えた序文の中でも、あらためて R.Montague 以来の形式意味論のアプローチの限界を強調しており、形式意味論に対立する立場から構成された理論である、と受け取られることは、ある意味で当然と言える。また、現在第一線で活躍している形式意味論の研究者たちの著書や論文に、まったく同じ問題を、しかも形式の方法こそ違えほとんど同じ切り口から取り扱っているにもかかわらず、メンタル・スペース理論に関する言及は見られないのが現状である。しかしながら、[...]理論の内容を冷静に見れば、メンタル・スペース理論は談話表示理論をはじめとする現在の形式意味論の諸理論ときわめて近い関係にあることは明らかである。また、Fauconnier (1985) の加筆された序文に見られる形式意味論批判にしても、真理条件だけでは文の意味を規定することはできないという点をはじめとして、形式意味論の研究者たち自身によってすでに十分に自覚され、改良策が提示されているものも多い。こうした点を考えると、メンタル・スペース理論をことさらに形式意味論と対立させて捉えるのではなく、むしろ形式意味論との相互交流の中でこの理論をいっそう明示的な理論に発展させていくことを目指す方が、メンタル・スペース理論と形式意味論の双方にとって、はるかに生産的な行き方であると言えよう。(三藤 1999: 83-84)

引用 3

メンタルスペース理論自体は真理条件意味論を否定する、といった強い立場を打ち出してはいないが、明らかにそのように位置付けしてもよい考え方であると思う。意味とは何か、といった問題自体を正面から取り上げる様なことはないが、人間の言語理解において、言語と外界との中間位置に認知レベルがあり、このレベルでのみ語ることでできる多くの意味関係が存在することが具体的に示され、メンタル・スペースという理論的構成物の妥当性を十分根拠づけることに成功している。もちろんメンタル・スペースを単なる解釈の方策の一助として片付けてしまう人々もいるが、そのような態度はこの理論を正しく評価できていないと言えないこともない。[...]言語の意味は我々人間の精神作用としての認知や概念形成と深く関わっている、と考えることにおいて、メンタルスペース理論はまさに認知意味論と呼ぶにふさわしい理論であると言える。(杉本 1998: 130-131)

メンタル・スペース理論の創始者であるフォコニエ自身はこの理論を明確に認知言語学の

理論と考えており、Fauconnier (1985) の新版 Fauconnier (1994) には代表的な認知言語学者である G.レイコフと E.スウィーツァーによるまえがきが付されている。

この二つの位置づけのうち、いったいどちらが正しいのか¹。メンタル・スペース理論は認知言語学の理論なのか、それともそうではないのか。以下では、メンタル・スペース理論を認知言語学の理論とみなすことに伴う困難を論じてみたい。

2. 認知言語学の概説書とメンタル・スペース理論

前節で述べたメンタル・スペース理論の両義的な位置づけは、『ことばの認知科学事典』(辻(編)2001)や『認知言語学キーワード事典』(辻(編)2002)に「メンタル・スペース理論」の項目があるいっぽうで、山梨(1995, 2000)や Ungerer and Schmid (1996)のように、認知言語学の概説を謳いながら、メンタル・スペース理論に一言も言及していない書物が多数存在するという事実には反映されている。大堀(2002: 27)は、メンタル・スペース理論を「言語による認知活動を、限定された複数の小規模の世界の結びつけに関する操作として理論化する方向」と特徴づけることにより、この理論を認知言語学のパラダイムの中に位置づけながらも、「このアプローチは独特の枠組みをもっているため、本書では安易に折衷して論じることはしない」と宣言している。

メンタル・スペース理論の掲げる「認知言語学」の看板にもかかわらず、認知言語学者がこれほどまでにメンタル・スペース理論を敬遠するのはなぜだろうか。メンタル・スペース理論を認知言語学の枠組みの中で論じるにあたって必要となる「折衷」とは何をさすのだろうか。

3. 認知言語学の「定義」とメンタル・スペース理論

「認知言語学」という用語を明確に定義することができれば、メンタル・スペース理論がその定義に適合するかどうかを検討することによって、この理論が認知言語学の理論であるかどうかを判定することができる。しかしながら、「認知言語学」を積極的に定義するのは容易ではない。池上(2008: 1)は「[認知言語学]の基本的な姿勢は、<ことば>を使う<ひと>(もう少し具体的に言うならば、<ことば>を使う<ひと>の<ところ>の働き)との関連で<ことば>を考えてみるということである」と言う。しかし、言語科学の究極の対象が人間の心であることを先に宣言したのは生成文法理論であり、この点にかぎり、生成文法理論と認知言語学は対立していない。おそらく池上は、生成文法理論による<ひと>の捉え方と認知言語学による<ひと>の捉え方には違いがあり、後者こそが<ひと>の正しい捉え方であると考えているものと思われる²。

これをふまえるならば、「認知言語学」とは、西村(1997)の述べるように、生成文法理

¹ この問題を考えるにあたって、創始者であるフォコニエの立場に特権性はない。フォコニエがいくらメンタル・スペース理論は認知言語学の理論だと言おうとも、それによってこの理論と認知言語学とのあいだに不整合が存在する可能性が否定されるわけではないからである。

² 西村義樹氏(東京大学)の個人談話(2012年)による。

論をはじめとする既存の理論に対する不満から出発したさまざまな研究に対して与えられたカバータームと言うほうが実情に即している。

引用 4

認知言語学についてまず留意すべきことは、この名称が唯一的に適用される理論的・方法論的に確立した単一の枠組み（生成文法における GB 理論や極小主義プログラムなどの統合理論に相当するもの）が存在する（または近い将来登場する見込みがある）わけではない、ということである。そうではなくて、既存の理論（とりわけ生成文法）といくつかの基本的な点で対立する複数の研究プログラムが、それぞれの独自性を保持しつつ、ゆるやかに結合して生じた一種の理論的共同体を「認知言語学」と呼んでいると考える方が実情に即している。（西村 1997: 650）

この否定的な定義によると、メンタル・スペース理論は、生成文法理論や形式意味論などとの対立のもとで捉えられれば認知言語学の理論となり、それらとの親近性のもとで捉えられれば認知言語学の理論とはならないことになる³。「メンタル・スペース理論」という用語がもつこうしたヤヌスの性質は、まさしく山口（2005）の言う、語の意味とは「どれとどれを同じとみなすか、どれとどれは[ママ]異質なものとみなすかという、恣意的な選択によって成立する」（山口 2005: 31）という事実を反映している。では、メンタル・スペース理論と認知言語学とを異質なものとみなす根拠としてはどんなことが考えられるだろうか⁴。

4. 表記の問題

まず、外的な要因として、メンタル・スペース理論が形式意味論と同様に形式論理学ないし数学の表記を多用するという点が挙げられる。Fauconnier (1985/1994) では、特に $x' = F(x)$ [原書 22、邦訳 29] のような関数表記が多用されている。こうした表記は、それだけでメンタル・スペース理論を形式意味論との類似性のもとに捉えさせる方向に作用する。さらに悪いことに、用いられている表記が統一的でないという問題がある。Fauconnier (1985/1994) を読むためには、次のような「翻訳」の知識が必要になる。

³ 形式意味論は生成文法理論の意味部門を補完するものであるから、ここで生成文法と形式意味論をひとくくりにして捉えることは適切であると考えられる。

⁴ メンタル・スペース理論と認知言語学とを同質なものとみなす根拠としては、引用 3 にあるように、「言語の意味は我々人間の精神作用としての認知や概念形成と深く関わっている、と考える」（杉本 1998: 131）ということが挙げられる。すなわち、「言語の研究は言語だけを見ていたのでは完結せず、言語以外の認知に踏み込まなければならないということである。以下で論じたいのは、この問題意識の共有にもかかわらず、どうしてメンタル・スペース理論は標準的な認知言語学とは異質なものとして捉えられるのかという問題である。なお、Lee (2001: 邦訳 127) は「認知言語学にとってこの理論 [= メンタル・スペース理論] がきわめて魅力的なのは、指示、条件文、メタファ、合成性をはじめとして、言語現象のさまざまな領域に新たな光をあてているからである」と述べているが、この言説はメンタル・スペース理論を認知言語学の側に引き寄せる理由づけとしては失敗している。「言語現象のさまざまな領域に新たな光をあてる理論」であることは、認知言語学と正反対の立場に立つ理論であることと論理的に両立するからである。

- (1) a. $P(x)$: 「 x は P である」⁵
 b. $F(x)$: 「 x とメトニミーの関係にあるもの」
 c. $r(M)$: 「 M において r とシネクドキーの関係にあるもの」

しかしながら、これは見かけ上の問題にすぎず、(1)の「翻訳」を見れば分かるとおり、メンタルスペース理論において論理式のように見えるものは、実は認知言語学の概念を表記したものにほかならない。(1)の表記を組み合わせると、Fauconnier (1985/1994: 53、邦訳 67) に登場する(2)の表記も「認知言語学の言語」に翻訳することができる。

- (2) a. $P(r(M))$: 「 M において r とシネクドキーの関係にあるものは P である」
 b. $P(F(r(R)))$: 「 R において r とシネクドキーの関係にあるものとメトニミーの関係にあるものは P である」

それゆえ、表記の問題は、メンタル・スペース理論を認知言語学から乖離させる決定的要因とはならない⁶。

5. 概念装置の定義の問題

5.1 認知言語学における「説明」

一般に、認知言語学においては、言語現象をより根源的な人間の心のはたらきによって説明するという方略が採用されている。いわゆる tough 構文を取りあげてみよう。次の(3a)と(3b)は直観的に同じ内容を表していると感じられるいっぽうで、まったく交換可能なわけでもないと感じられる。

- (3) a. It is difficult to read this book.
 b. This book is difficult to read.

西村・野矢 (2013: 第5回) はこの事実を次のように説明する。(3a)と(3b)の共通点は、これらがいずれも「行為は、その遂行に難易度があり、ある行為の難易度はその行為と関連するもの(行為の対象、相手、場所など)の特性によって決まる」というフレーム(=百科事典的知識のまとめ)を共有し、かつその難易度が高いことを述べる文であるという点である。相違点は、(3a)の difficult が行為の難易度という側面に焦点があるのに対して、(3b)の difficult は行為の対象である this book の特性に焦点があるという点である。この焦点の

⁵ これは述語論理学における $P(x)$ の解釈と同じである。

⁶ ただし、個人的印象を語ってよければ、こうした表記のために、メンタル・スペース理論に対する「食わず嫌い」ないし「食えず嫌い」に陥る認知言語学者は少なくない。表記法は理論の実質をなすものではないが、だからと言って理論の命運に実質的な影響を及ぼさないというわけでもない。

違いに対応して、(3a)では行為を表す不定詞句 *to read this book* が実主語となっているのに対して、(3b)では *this book* が主語となっている。この説明には難解なところがまったくない。「行為は、その遂行に難易度があり、ある行為の難易度はその行為と関連するもの（行為の対象、相手、場所など）の特性によって決まる」というフレームはごく常識的に想定できるものであるし、フレーム内のどこに焦点を当てるかによって主語の選択に違いが生じるという説明も難なく理解することができる⁷。

次節以降では、メンタル・スペース理論における言語現象の「説明」が、本節で見た認知言語学的な説明とは似ても似つかないものであることを確認する。

5.2 定義の欠如

標準的な認知言語学の説明において用いられる認知的概念と異なり、メンタル・スペース理論で用いられる諸概念は定義が不明確であり、それぞれの研究者が自分にとって都合のよいように解釈して用いているのが現状である（井元 2010: 22、今井・西山 2012: 31）。第4節において、メンタル・スペース理論の表記 $r(M)$ は「 M において r とシネクドキーの関係にあるもの」と解釈されると述べた。「シネクドキーの関係」は認知言語学の基本概念であり、ここで新たに問題にすべきことはない。他方、この表記に登場する M はメンタル・スペースをさし、 r は役割と呼ばれる対象をさしているが、いずれも明確に定義されていない。とりわけ、理論の名に用いられている（メンタル・）スペースという概念でさえ、「理論の根幹をなす重要な概念でありながら、明確な定義が与えられているわけではなく、用いる学者によって微妙に異なった対象をそう呼んでいるようである」（井元 2010: 22）という点は見逃すことができない⁸。

一般に、理論的对象については、存在が分かっただけで属性が不明である場合と、属性（定義）が分かっている存在が不明である場合とがある。たとえば、冥王星が発見されながらも、その質量が不明であるといった場合が前者に対応し、「天王星の外側の軌道を回る惑星」があるはずだと予測されながらも、その存在が確認できない場合が後者に対応する。これらの場合には、それぞれ属性と存在を確認するべく探究が行われることになる。ところが、「メンタル・スペース」に関しては、その存在が確認されていないうえに、その属性も不明である。メンタル・スペースなるものの存在が確認されていないということについては異論の余地がないだろう。そのようなものが存在するとしたら、その存在場所はわれわれの脳内だと思われるが、将来の脳科学研究によっても、そうした心的表示が発見され

⁷ もっとも、「理解することができる」ということと「納得することができる」ということは別である。認知言語学の説明に関しては、「言語学者でなくとも気づくような観察や指摘が多[i]」（柚原 2014: 133）という不満を表明する研究者がいる。いわば「そんなことは言われなくても分かっている」という不満である。（公式に表明はしないまでも）そうした不満を感じている研究者は相当数いるものと推察される。

⁸ メンタル・スペース理論では、「メンタル・スペース」と「スペース」が同じ意味で用いられる。これら他に「領域」という用語も用いられるが、これが「スペース」とまったく同じものをさすのか、それとも別のものをさすのかはよく分からない。この点もまた、井元（2010: 22）の言うように、用いる学者によって異なるのだろう。

る可能性はきわめて低い。そもそもいかなる脳状態がメンタル・スペースに対応するかが分かっていないからである。では、メンタル・スペースの属性(定義)からその存在に迫ってはどうか。いや、それもうまくいかない。「構造をもった増加可能集合 (structured, incrementable sets)」(Fauconnier 1985: 16, 邦訳 22)、「比較的小さな情報管理領域」(坂原 1992: 453)、「思考、会話の進行につれて次々に増えていく部分的構造 (partial structures that proliferate when we think and talk)」(Fauconnier 1997: 11, 邦訳 14)、「推論や世界とのインターフェイスに認知的基礎を与えるために、談話が作り出す部分的、局所的認知領域」(坂原 2001: 316)、「内部構造を持つ互いに結合された領域」(野村 2002: 241) などと言ったものを探せと言われても、何を探せばよいのかが分かる人はいないだろう。これは、メンタル・スペースなるものの属性(定義)が実質的に不明であることを物語っている⁹。

ならば明確に定義すればよいではないかと言われるかもしれない。しかし、事態はそれほど単純ではない。井元(2010)は、果敢にも、メンタル・スペース理論の諸概念に明確な定義を与えようと試みている。

引用 5

スペース: 述定の対象となる最小の心的領域が存在し、述定による属性を保持していると考えられる領域 (井元 2010: 22)

晦渋な定義で、理解するのに骨が折れるが、さしあたりその点は措いておこう¹⁰。問題は、この定義が、そのわずか1ページ後の論述と矛盾していることである。

引用 6

[...]統合とは原理上異なりうる複数のスペースを大きなひとつのスペースとしてまとめる働きを言う。(井元 2010: 23)

複数のスペースの統合によって作られる「大きなひとつのスペース」はもはや「最小の領域」ではなく、引用5の定義に従うならば、スペースではない¹¹。引用5と引用6を両立させようとするれば、(メンタル・)スペースは「ときに最小の心的領域で、ときに最小の心的領域でないようなもの」といった定義にならざるをえない。この定義を理解し、この定

⁹ 極端なのはLee(2001)で、この本は、メンタル・スペース理論の概説を行いながらも、「メンタル・スペース」の定義をまったく述べていない。メンタル・スペースについて語る際には、意味不明な定義を述べるか、まったく定義を述べないかの選択を迫られるようである。

¹⁰ 引用5の井元の定義に関する素朴な疑問は、どうして「スペース: 述定の対象となる属性を保持していると考えられる最小の心的領域」というコンパクトな日本語になっていないのかということである。こう書き換えたところで晦渋でなくなるわけではないが、少なくとも日常言語の文法に沿ったものにはなるだろう。

¹¹ (メンタル・)スペースに関しては、「用いる学者によって微妙に異なった対象をそう呼んでいる」(井元 2010: 22)という問題だけでなく、同じ学者が場合に応じて都合のよい定義を採用しているという問題があることが分かる。その張本人が厳密な定義を追求した井元であるというのは皮肉な事実である。

義に基づいて「メンタル・スペースは実在するか」という問いを探究することができる人がどれほどいるだろうか。

5.3 定義の不可能性

前節で見たように、井元 (2010) は、メンタル・スペース理論の根幹をなす「メンタル・スペース」という概念が明確に定義されていないことに対して不満を表明し、この概念を明確に定義しようとした。しかし、その結果、かえって意味不明な定義に行き着いてしまった。この失敗は井元の能力の欠如に起因するものだろうか。おそらくそうではなく、この失敗は、定義不可能な概念を定義しようとしたことから生じる必然的な結果であったと思われる。

メンタル・スペース理論は、もともと「この理論で使われる概念はどれもみな一般的で、この理論にしか見られない特殊な概念はほとんどないといってよい」(坂原 1992: 455) という特徴をもっている。理論の根幹をなす「メンタル・スペース」という概念も、この理論独自の概念ではなく、たんに日常語の「領域」を専門用語ふう言い換えたものにすぎないと考えられる。領域には大きなものもあれば小さなものもあり、どの程度の大きさが適切であるかはその使用目的によってのみ決まる。坂原 (1992: 455) は、この点を正しく捉えて、メンタル・スペースとは「情報を処理しやすい大きさにまとめておくための領域」のことであると述べている。「処理しやすい大きさ」は使用目的によってさまざまであるから、この概念をこれ以上明確に定義することは不可能である。井元 (2010) はこの点を見落とし、ありもしない「汎用的な属性」を「メンタル・スペース」概念から強引に抽出しようとしてしまったのである。

引用 7

言語における普遍性と多様性は言語学が常に念頭に置いておかななくてはならない問題であり、言語学の目的は究極のところ、この普遍性と多様性を記述仕分ける[ママ¹²] ことにあると言っても過言ではない。[...]いかなる属性を汎用的な属性として抽出し、記述の手段にするべきか、という問題が理論の最初に問われるべき問いである。

(井元 2010: 255)

汎用的な属性の抽出に伴う必然的失敗は、時間にかかわるメンタル・スペースの定義にも見られる。たとえば、PAST とは、各言語のいわゆる過去形を分析するために用いられるメンタル・スペースであり、井元はこれを次のように定義する。

引用 8

¹² この表現は同書に散見されるが、「記述し分ける」が正しいと思われる。

PAST: あるスペースから見て隣のスペースが時間的に先行する位置にあることを示す。スペース属性は Fact である。(井元 2010: 30)

メンタル・スペース理論では、「PAST 概念を用いて各言語の過去形の用法を説明する」方向での研究が行われている。だが、はたして、過去形という概念をいまだ理解できない段階の者が、PAST の定義に登場する「時間的に先行する」という概念を理解できるのだろうか。むしろ、過去形の理解が PAST の理解に先立つのではないかと考えられる。そうだとすると、PAST の定義には「過去形を理解する能力」が密輸入されており、PAST は過去形の理解に寄りかかる形でのみ理解可能な概念であることになる。井元 (2010: 29) は PAST が「通常使われる意味・形態的カテゴリーである『過去 (形)』[...]とは全く異なっている」と述べているが、これはおそらく井元の思い違いである。PAST が過去形とまったく異なるなどということはなく、むしろ両者のあいだには「PAST は過去形の理解に基づいて理解される」という関係が成り立っている。一般に、「X によって Y を説明する」とは、十分に理解されているとは言えない概念 Y を、よりよく理解されている X によって理解しようとする営みである。その点で、過去形を PAST (+ α) によって「説明」しようとする試みは、最初から方向を間違えているのである。

井元 (2010) の意気込みとは裏腹に、そもそも PAST をはじめとする抽象的な概念を一般的に定義しようとする自体に無理がある。というのは、抽象度の高い概念は、より具体的な概念によって理解されるしかないからである。たとえば「哺乳類」は、「犬」「猫」「ネズミ」「人間」などの概念をもつ者だけが真に理解することのできる概念であろう¹³。同様に、「時間的に先行する」というのは、「過去」という概念をもつ者だけが真に理解することのできる概念であろう。それゆえ、一般に「この理論で使われる概念はどれもみな一般的で、この理論にしか見られない特殊な概念はほとんどないといってよい」(坂原 1992: 455) という特徴をもつ理論は、そうした概念を定義することができないという弱みを同時にもつことになる。メンタル・スペース理論で用いられる諸概念の定義が明確でないのは、研究者が定義を怠ったために生じた事態ではなく、この理論が必然的に招く結果なのである。

5.1 節で見たように、一般に、言語現象に対する認知言語学的な説明においては、理解の容易な概念が用いられ、それが認知言語学の強みとなっている。本節で見たように、メンタル・スペース理論においては、これとは反対に、理解しようとするほど理解が難しくなるような概念装置が用いられている。こうした説明概念の難解さ、あるいは疑わしさは、標準的な認知言語学と際立った対照をなしている。これが認知言語学においてメンタル・スペース理論が敬遠される理由の一つであることは間違いないと思われる。

¹³ 概念を「真に理解する」とは、野矢 (2011: 185) の言う意味で概念を「所有している」状態に対応する。ある概念を所有していると言えるのは、その「概念の眼目を理解し、その概念を実際に使用できる」(ibid.) 場合である。「なんとなく聞いたことがある」というくらいでは概念を所有しているとは言えず、それゆえ、その概念を真に理解しているとは言えない。

仮にメンタル・スペース理論を認知言語学の枠組みに組み込もうとするならば、「メンタル・スペース」をはじめとする諸概念が容易に理解可能なものであるというフィクションを受け入れなければならない。しかし、これはかなり高いハードルである¹⁴。メンタル・スペース理論を認知言語学の枠組みに取り込むにあたってこれほどの「折衷」が必要となるなら、大堀 (2002: 27) が「このアプローチは独特の枠組みをもっているため、本書では安易に折衷して論じることはしない」と宣言したこともよく理解できる。さまざまな外的事情から公式に明言されることはないものの、認知言語学にとってメンタル・スペース理論は「みにくいアヒルの子」なのである。

6. 認知の反映としての自然言語？

メンタル・スペース理論と認知言語学のあいだには、「折衷」がそもそも不可能ではないかと思われる対立点がある。一般に、認知言語学では、言語には人間の認知が反映されていると考える¹⁵。

引用 9

外部世界の理解には、われわれの認知が反映されている。またこの認識の過程は、いろいろな形で言葉の世界に反映されている。(山梨 1995: 4)

引用 10

認知言語学のアプローチでは、日常言語の表現は、マイクロレベルからマクロレベルにいたるどのような要素であれ、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される。(山梨 2000: 11)

引用 11

言語の際立った特徴の一つは、「ありのまま」の現実を写しとるだけでなく、出来事を多様な捉え方のもとに描き出すための手段を備えているという点である。

(大堀 2002: 2-3)

これに対して、メンタル・スペース理論では言語を次のように捉える。

¹⁴ 2014年8月7日現在、インターネット上の質問サイト「Yahoo! 知恵袋」に、メンタル・スペース理論における「メンタル・スペース」という用語の意味が理解できないという趣旨の質問が掲載されている (http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1239325422)。回答が一つだけついているものの、その内容は「Fauconnier (1985/1994)の日本語版を図書館で借りて読んでください」といったものでしかない。質問者はFauconnier (1985/1994)を読んでも「メンタル・スペース」の定義が理解できない(あるいは理解できそうにない)と訴えたかったのであろうから、これに上記のような回答しか与えられないということは、回答者自身も「メンタル・スペース」の何たるかを理解していないのではないかと疑われる。実のところ、本節で論じたように、この概念は理解しようとしても理解できない構造になっているので、回答者を責めるのは酷かもしれない。

¹⁵ 酒井 (2013) はこの考え方が引き起こす哲学的諸問題を論じている。

引用 12

言語がどのように作られているかと言えば、言語が構築物を表すのではなく、われわれが最小限の文法構造から与えられた文脈に適した構築物を作り出しているのである。この点では、言語は非常にうまく作られているようである。言語そのものは認知的構築を行わない。言語は、与えられた状況での認知的構築に適した領域や原則を見つけるための最小限だが十分な手がかりを提供するに**すぎない**。

(Fauconnier 1985/1994: 邦訳 xviii、強調は原文による)

引用 13

実際に目に見える言語は、われわれが考えたり話したりするときに行われる目に見えない認知構築の、氷山の一角にすぎない[...]。この隠された舞台裏の認知がわれわれの精神的、社会的生活を規定しており、言語はその主たる外的現れの 1 つなのである。(Fauconnier 1997: 邦訳 2)

引用 14

言語表現 E はそれ自身では意味をもっていない。言語表現がもっているのは**意味ポテンシャル** (meaning potential) であり、意味は、完全な談話と文脈の中で始めて実際に作られるのである。談話の展開は、複雑な認知構築を引き起こす。認知構築には、コネクタによって互いに結びつけられた内部構造をもつ領域の導入が含まれる。領域の導入は、言語、文脈、状況による手掛かりによってなされる。文法的手掛かりは、構築プロセスに非常に重要ではあるが、それ自身では構築を決定するには十分でない¹⁶。(Fauconnier 1997: 邦訳 47、強調は原文による。)

思いきり図式化して言うなら、認知言語学が言語を認知活動の出力と捉えるのに対して、メンタル・スペース理論は言語を認知活動への入力として捉える。この違いは次のような違いにつながっていく。すなわち、認知言語学が、言語を研究することによって人間の認知に迫ることができると考えてのに対して、メンタル・スペース理論は、人間の認知に迫るためには、言語を見ているのでは不十分で、言語を手がかりにして作り出される認知的構築物 (これはメンタル・スペース構成と呼ばれる) を研究しなければならないと考える。この違いはさらに次の違いを生み出す。すなわち、認知言語学の主たる研究対象が言語であるのに対して、メンタル・スペース理論の主たる研究対象は認知的構築物である。この認知的構築物は「言語構造とは独立している」(Fauconnier 1997: 邦訳 45) から、メンタル・スペース理論の主たる研究対象は言語ではないことになる。「メンタル・スペース理論[...]

¹⁶ 引用 14 の「十分でない」と引用 12 の「十分な」は矛盾しているように感じられる。おそらく引用 12 の「十分な」は「与えられた状況においては十分な」と読まれるべきものであろう。

では、われわれが話したり、聞いたり、考えたりする際に行う意味構築を、メンタル・スペースの構築、管理、運用として理論化する」(坂原 2001: 316)。

これはきわめて重大な視点の相違であると言わなければならない。言語の研究をしたいと思って、認知言語学の理論の一つとされるメンタル・スペース理論を学んでも、実際に従事させられるのは「メンタル・スペースの構築、管理、運用」の研究である。これでは大きな失望につながりかねない。ここにこそ、認知言語学者がメンタル・スペース理論を敬遠するもう一つの理由がある。この重大な視点の違いを「折衷」することができるかどうかは大いに疑問である。

7. 認知的構築物をめぐる問題

7.1 心的表示？

第6節において、メンタル・スペース理論の主たる研究対象が、言語そのものではなく、言語を手がかりにして作り出される認知的構築物であることを確認した。メンタル・スペース理論は、この認知的構築物を研究することで、「最終的に、われわれはどのように考えるかを明らかにしようとする」(坂原 2001: 332)。では、この認知的構築物の正体は何か。

一つの解釈は、認知的構築物とは発話や思考の意味表示に相当するものだというものである。金水・今仁 (2000) ははっきりとこの解釈を採用している。

引用 15

メンタル・スペース理論は、G.Fauconnier の著作物 (Fauconnier 1985, 1994, 1997) を中心に発展してきた、談話の表示理論である。この理論において、発話はメンタル・スペース (mental space) と呼ばれる心的表示 (mental representation) を構成する指令とみなされる。

(金水・今仁 2000: 196、「表示理論」の強調は引用者、それ以外の強調は原文による。)

これほどはっきりとは述べられていないにせよ、この解釈は「メンタル・スペース (あるいはそれに相当するもの) を設定することによってのみ表現できる意味が言語にある」(杉本 1998: 130、強調は引用者による)、「談話全体の解釈は[...]メンタル・スペース構成により表現される」(坂原 2001: 317、強調は引用者による)、「[メンタル・スペース理論の]図式のもう1つの利点は[...]過去未来完了形を正しく記述できる」(井元 2010: 28、強調は引用者による)といった語り方のうちにも姿を現している。この解釈のもとでは、Fauconnier (1997: 邦訳 45) の、認知的構築物が「言語構造とは独立している」という発言とは裏腹に、メンタル・スペース理論とは、自然言語の文を別の記号体系に翻訳する理論であることになる。いわば、日本語の文を英語の文に翻訳するように、自然言語の文をメンタル・スペース理論特有の表記(「メンタル・スペース言語」とでも呼ぶべきもの)に

翻訳するのである¹⁷。

しかしながら、メンタル・スペース理論の言う認知的構築物を心的表示と解釈することには大きな問題がある。表示というものは、定義上、解釈者を要求する。誰も目にするものがない、あるいは誰も理解することのできない道路標識が表示としての機能を果たしえないのと同じく、誰も目にするものがない、あるいは誰も理解することのできない意味表示は表示としての機能を果たしえない。メンタル・スペース構成は、それを解釈する者がいなければ、たんなる無意味な模様でしかないのである。ここで、特別な訓練を受けた者でなければ、メンタル・スペース言語を理解することができないという事実注目する必要がある。これは次のような思考実験によって確かめることができる。日本語を理解しない英語話者に、たとえば「フランスでは、ウォーターゲートはニクソンになんのダメージも与えなかった」という文 (Fauconnier 1997: 邦訳 132) を繰り返し聞かせ、そのたびに、この文の解釈 (の一つ) に対応するメンタル・スペース構成の図を提示する。これにより、実験に参加した英語話者は、この文を聞いたたびに、特定のメンタル・スペース構成を思い浮かべる (つまり、この文をメンタル・スペース言語に翻訳する) ことができるようになる。しかし、だからと言って、この英語話者が「フランスでは、ウォーターゲートはニクソンになんのダメージも与えなかった」という日本語の文を理解できるようになったと言うことには無理があるだろう。言語理解とは、たんに言語表現を心的表示と結びつけるような過程ではありえない (Wittgenstein 1953)。心的表示も一つの言語である以上、それをそれとして理解しなければならない。この点において、自然言語の文はメンタル・スペース言語に翻訳されることによってはじめて理解されるというメンタル・スペース理論の主張と、一般の自然言語の話者はメンタル・スペース言語を理解していない (にもかかわらず自然言語の文が理解できる) というまぎれもない事実とのあいだには不整合があるように思われる。

この不整合を回避するためには、「われわれはメンタル・スペース言語を理解しているという自覚はないが、実は理解しているのだ」と主張する以外にない。この主張は、言語使用者の脳の中に、その人に代わって難解な心的表示を理解してくれる小人がいるという主張となんら変わるところがない。この主張を受け入れたとして、その小人の脳の中に作られる心的表示はいったい誰が見て理解しているのか。以下、無限後退に陥ることは明ら

¹⁷ 実際、言語を手がかりとして作り出される認知的構築物が言語構造と独立しているという Fauconnier (1997: 邦訳 45) の発言を真に受けることはできない。「メンタル・スペース嫌い」を量産する原因の一つとして、この理論で用いられる例文が「この絵では緑の目の少女が青い目をしている」「誰もが魔女が雌馬をだめにしたと信じている」「フランスでは、ウォーターゲートはニクソンになんのダメージも与えなかった」といった複雑な解釈をもつ文ばかりであり、「私は今朝コーヒーを飲んだ」という単純な文が考察の対象となることはないという事実が挙げられる。もしも認知的構築物が言語構造と独立であるならば、「私は今朝コーヒーを飲んだ」という文に対しても、この文と独立した認知的構築物が作り出されるはずであり、それを考察の対象とすることができるはずである。しかし、実際には、「見たまま理解できる」タイプの文に対しては、メンタル・スペース理論の出る幕はない。複雑な文の解釈をメンタル・スペースの表記法に翻訳してみせることにおいてのみメンタル・スペース理論の強みが発揮されるという事実は、この理論が自然言語から別の記号体系への翻訳理論であることを暗に物語っている。

かである。このことは、「心的表示としての認知的構築物」という考え方が、哲学史上悪名高いホムンクルス (脳の中の小人) 問題 (Dennett 1992, 山口 2005) を引き起こすことを示している。

7.2 認知的構築物の空転

前節の議論から、メンタル・スペース理論の言う認知的構築物を心的表示として解釈するのは適切でないということが分かる¹⁸。残された道は、「言語表現は、メンタル・スペースを作り、そこに要素を導入し、要素に情報を付け加え、要素どうしを関係づける。複数のスペースは、基底メンタル・スペース (base mental space) を出発点に、さまざまな従属関係で結ばれるメンタル・スペース構成 (mental space configuration) と呼ばれるネットワークを作る」(坂原 2001: 316-317) という前提を受け入れたうえで、なぜかは分からないが、「領域全体の操作が言語理解の過程を表わす」(坂原 1992: 453) と解釈することである。すなわち、自然言語の文はメンタル・スペース構成を作り、メンタル・スペース構成を操作するとなぜか元の自然言語の文が理解できてしまう、ということである。この解釈のもとでは、ボタンを押せばジュースが出てくるように、メンタル・スペース構成を操作すると文を理解することができる。このとき、ボタンがジュースを表示しているわけではないのと同様に、メンタル・スペース構成が何かを表示しているわけではない。メンタル・スペース構成を操作すると文を理解することができるのはなぜか、という問題は謎として残るが、これは将来の認知科学的研究で明らかになると考えるのである。

この「操作対象としての心的構築物」という考え方はうまくいくだろうか。以下では、この考え方が空転する例として、メンタル・スペース理論における同一性言明の分析と、時制の分析をごく簡単に検討することにする。いずれの場合においても、「メンタル・スペース構成を操作することによって元の文が理解できる」のではなく、「元の文が理解できているからこそ、スペース構成なるものを仮定し、操作することができるようになる」と捉えるほうが適切であり、この点で、メンタル・スペース理論の説明は「説明する側の概念」と「説明される側の概念」を取り違えていることを示す。

同一性言明とは次のような文のことである。

- (4) ヘスペルスはフォスフォルスだ¹⁹。(Fauconnier 1985/1994: 邦訳 198-199)

¹⁸ Fauconnier (1997: 邦訳 45) は、この認知的構築物が、言語構造の基底形ではなく、言語ないし言語的意味の意味表示でもなく、世界の表現でもなく、世界のモデルの表現でもない述べている。ではなんなのか、と問いたくなる。野村 (2002: 241) は「この『認知レベル』とは言語構造の表示とも外部世界の表示とも異なり、言語を外部世界に関連づける認知インターフェイスである」と述べているが、率直に言って、私にはこの定義を理解することができない。5.3 節で述べた事情もあり、メンタル・スペース論者に対してこの問いへの明確な答えを期待するのは難しい。

¹⁹ ヘスペルスとはいわゆる宵の明星であり、フォスフォルスとはいわゆる明けの明星である。これらはどちらも金星をさすから、=で結合することができる。しかし、「宵の明星」と「明けの明星」とではそもそも表している概念的意味が違くと判断する人がいる。そこで、同一性言明をめぐる議論では、あえて概念的意味を剥奪するために、「ヘルペルス」「フォスフォルス」というギリシャ語起源の名前が用いられ

ヘスペルスもフォスフォルスも同じ天体 (すなわち金星) をさすから、金星を a とすると、(4)は $a = a$ という当たり前のことを言っていることになる、それにもかかわらず、われわれは(4)を見て「なるほど、そうだったのか」と思うことができる。言い換えると、(4)は認識価値をもつ。 $a = a$ という当たり前の命題から認識価値が生じるのはなぜか。これがフレーゲ以来の言語哲学の難問であった。

Fauconnier (1985/1994: Ch.5) によると、(4)は「あるスペースの要素 b と c を、どちらも別のスペースの要素 c と結合する」ようなスペース構成を作り出し、これが(4)の解釈に対応する。しかし、「あるスペースの要素 b と c が、どちらも別のスペースの要素 c と結合する」操作を行って始めて(4)が理解できるとは考えられない。実際にはこの逆であり、(4)の解釈を理解しているからこそ「あるスペースの要素 b と c が、どちらも別のスペースの要素 c と結合する」操作を行うことができるのである。この点で、Fauconnier (1985/1994) の「説明」は循環しており、説明になっていない (Sakai 2012)²⁰。

次に、メンタル・スペース理論の枠組みによる時制論を取りあげてみよう。井元 (2010) は、フランス語において「過去の過去」を表す時制として、大過去 (助動詞の半過去 [= 未完了過去] + 過去分詞) を用いることができるいっぽうで、前過去 (助動詞の単純過去 [= 完了過去]) を用いることができないことを指摘する。

- (5) Elle écarta le rideau, et reconnut le bonnet qu'elle {a. OK *avait prêté* / b. * *eut prêté*} la veille à Thérèse. (彼女はカーテンを開け、前日にテレーズに貸していた帽子があるのに気づいた。)(井元 2010: 39、提示方法を改変。和訳と強調は引用者による。)

(5)の「貸していた」を前過去で表現することができないという事実を、井元 (2010) は次のように「説明」する。

引用 16

形態上の大過去と前過去の違いは助動詞部分が半過去であるか単純過去であるかであり、半過去と単純過去の意味素性の違いは前者が PAST IMPERFECTIVE、後者が PAST PERFECTIVE である。PERFECTIVE だと定義により、V-POINT は EVENT 位置

ることが多い。

²⁰ この問題はメンタル・スペース理論に特有のものではなく、同一性言明の認識価値を心的操作によって説明しようとする理論に共通してあてはまるものである。Recanati (2012) は、ヘスペルスに対応する心的ファイルとフォスフォルスに対応する心的ファイルの一つのファイルに統合することで(4)の認識価値が生まれると主張する。しかし、ファイルの統合は同一性言明の解釈を説明するものではなく、逆に、ヘスペルスとフォスフォルスが同一であることを理解したからこそファイルの統合が可能になると考えられる。同一性言明の解釈の説明に同一性概念が忍び込んでいるという点で、レカナティの説明は循環している。Recanati (2012: Ch.8) はこの問題を自覚しつつも、対処に苦慮しているように見える。同一性言明の認識価値の源泉については、いまなお哲学者たちの意見の一致を見ていない。

に移動することができない。[(5b)]において eut prêté [= 助動詞の単純過去 + prêter 「貸す」の過去分詞] の述定が行われる直前の EVENT と FOCUS は S2 にあり、ここへの V-POINT の移動が禁止されていることになる。そのため S2 から S3 に対して PERFECTIVE な PAST の認定ができず、結果として PAST + PAST を表現することができない、ということである。(井元 2010: 40)

「何を言っているのかさっぱり分からない」というのがふつうの反応だろう。(5)のフランス語の文を理解できる人でさえ、引用 16 の「説明」を理解するのは難しい。引用 16 が(5)の心的表示についての説明であるならば、引用 16 の説明はただちに却下することができる。というのは、引用 16 が心的表示についての説明であるならば、引用 16 の内容を理解することができない人は、元の文である(5)を理解することができないという誤った結論が導き出されるからである。しかも、引用 16 には「定義により」「禁止されている」という文言が登場する。これらが心的表示 (すなわち 7.1 節で言うところのメンタル・スペース言語) に対する制約 (すなわちメンタル・スペース言語の文法) を述べたものであるならば、この定義や禁止条項を読んで理解することができない人は、やはり元の文である(5)を理解することができないという結論に至ってしまう²¹。この結論を避けるには、われわれに代わって心的表示を理解してくれるホムンクルスが必要となる。

しかし、メンタル・スペース理論における認知的構築物を心的表示として解釈する可能性は前節で却下した。そこで、以下では、引用 16 を、フランス語話者が(5)を理解する際に無意識に行っている心的操作として解釈し、「定義により」「禁止されている」をそれぞれ「フランス語話者が無意識のうちに従っている制約により」「心的操作として不可能である (たとえば、ボタンを押すことはできても、引くことが不可能であるのと同様に)」と読み替えることにする。

この読み替えのもとで、引用 16 は(5)の解釈を説明していると言えるだろうか。引用 16 を読み解いてみよう。「半過去と単純過去の意味素性の違いは前者が PAST IMPERFECTIVE、後者が PAST PERFECTIVE である」というのは「半過去が未完了時制で、単純過去が完了時制である」という周知のことを述べているにすぎない。「PERFECTIVE だと定義により、V-POINT は EVENT 位置に移動することができない」というのは「完了した事態を眺めるには、その事態が完了した時点以降の視点に立たなければならない (その事態が完了していない時点では、事態が完了したかどうかを見届けることができない)」ということである。

「[(5b)]において eut prêté [= 助動詞の単純過去 + prêter 「貸す」の過去分詞] の述定が行われる直前の EVENT と FOCUS は S2 にあり、ここへの V-POINT の移動が禁止されている

²¹ アラビア語が分からない人がアラビア語の文を理解しようとして、そのアラビア語の文の英訳を読んでいる状況を考える。その人が英語も不自由で、かつ英文法についての説明 (文法用語の定義、文法上の禁止事項など) も理解できないならば、その人は元のアラビア語の文を理解することはできないであろう。「アラビア語の文 = 例文(5)、英語 = メンタル・スペース言語、英文法 = メンタル・スペース言語の文法」と置き換えれば、本節の議論が成り立つことが確認できる。

ことになる」というのは、前述の制約により、「貸すという行為が完了した事態として捉えられ、完了時制で表されている以上、貸すという行為が完了していない時点 (これを S2 と呼ぶ) に視点を移してはならない」ということにほかならない。「そのため S2 から S3 に対して PERFECTIVE な PAST の認定ができず」というのは「S2 に視点を移すことができない以上、『S2 から見た過去 (これを S3 と呼ぶ)』について語るができない」ということである。「結果として PAST+PAST を表現することができない」というのは、『S2 から見た過去 (S3)』について語れない以上、現在から過去の時点 S2 を眺め、S2 からさらに過去の時点 S3 を眺めることができない」、すなわち「S3 を『過去の過去』として捉えることができない」ということを意味している。

以上の解釈から、語り方が極端にややこしいだけで、引用 16 は、ほぼ「フランス語の前過去には視点制約があり、そのため (大過去と違って) 過去の過去を表すことができない」という伝統文法レベルの情報以上のことは述べていないことが分かる。引用 16 で述べられた難解な心的操作を懸命に実行しても、その先になんら新しい風景がひらけてはいないのである。どうしてこのようなことになるかということ、引用 16 で語られている「定義」や「禁止」の唯一の源泉が自然言語に関する(5)の事実だからである。(5)に見られる制約を観察し、その観察に基づいて引用 16 で語られる制約が立てられたというのが正しい順序であり、フランス語話者が引用 16 のような心的操作を行うことによってはじめて(5)の解釈を理解する、というのは倒錯したストーリーでしかない。

このように、メンタル・スペース理論においては、理解の容易な自然言語に関する事実に基づいて理解の困難な心的操作が提案されているというのが実情であり、「説明する側 (心的操作)」と「説明される側 (自然言語に関する事実)」があべこべになっている。これは、理解の困難な自然言語に関する事実を理解の容易な人間の認知に関する事実によって説明しようとする標準的な認知言語学的手法とはあきらかに乖離したものである。この乖離のために、メンタル・スペース理論と認知言語学を折衷することは困難であり、メンタル・スペース理論は認知言語学にとって「みにくいアヒルの子」の相貌を帯びるのである。

8. おわりに

メンタル・スペース理論の主たる研究対象は、自然言語そのものではなく、自然言語を手がかりにして作り出される認知的構築物である。この認知的構築物の構成要素であるメンタル・スペースは、定義が不明確で、明確に定義しようとすればするほど必然的に定義が困難になるというジレンマを抱えている。また、この認知的構築物がもつとされる性質や制約は実はわれわれの自然言語に関する理解を密輸入したものであり、独立の根拠によって正当化されたものではない。これらの点で、メンタル・スペース理論の枠組みでの研究は、言語現象をよりよく理解されている認知過程によって、直観的に分かりやすいやり方で説明するという認知言語学の研究手法とは大きくかけ離れている。そして、このことが、メンタル・スペース理論が認知言語学者によって敬遠される原因となっている。

この論文では、メンタル・スペース理論がいかにかに「認知言語学らしくない」かに重点を置いて論じた。これを受けて、こんどは、この理論がいかにかに「認知言語学らしい」かを論じることが認知言語学者の側に求められる。そうした議論がじゅうぶんに行われなければ、メンタル・スペース理論は「認知言語学界の冥王星」というメタファーのもとに降格の憂き目を見ることになるだろう。

付記

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C）、研究代表者：酒井智宏、課題番号：25370437「意味排除主義に基づく固有名と単称性に関する研究」）の助成を受けて行われた。

参考文献

- Dennett, Daniel C. (1992) *Consciousness Explained*, New York: Bach Bay Books. 山口泰司（訳）『解明される意識』東京：青土社、1997年。
- Fauconnier, Gilles (1985/1994) *Mental Spaces*, Cambridge, MA: MIT Press, 1985, Cambridge: Cambridge University Press, 1994. 坂原茂 他（訳）『新版メンタル・スペース』東京：白水社、1996年。
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press. 坂原茂 他（訳）『思考と言語におけるマッピング』東京：岩波書店、2000年。
- 池上嘉彦（2008）「主観的把握：認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 3: 1-6.
- 今井邦彦・西山佑司（2012）『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』東京：岩波書店。
- 井元秀剛（2010）『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』東京：ひつじ書房。
- 金水敏・今仁生美（2000）『意味と文脈』東京：岩波書店。
- Lee, David (2001) *Cognitive linguistics: An introduction*. Oxford: Oxford University Press. 宮浦国江（訳）『実例で学ぶ認知言語学』東京：大修館書店、2006年。
- 三藤博（1999）：「談話の意味表示」『談話と文脈』岩波講座『言語の科学』第7巻第2章、東京：岩波書店
- 西村義樹（1997）「認知言語学の潮流」『英語青年』第142巻第12号：650-654.
- 西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学—』東京：中公新書。
- 野村益寛（2002）「メンタル・スペース理論」in 辻幸夫（編）（2002）：241-242.
- 野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』東京：講談社。
- 大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京：東京大学出版会。
- 大森荘蔵（1981）『流れとよどみ—哲学断章』東京：産業図書。
- Recanati, François (2012) *Mental Files*, Oxford: Oxford University Press.
- 坂原茂（1992）「メンタル・スペース理論：自然言語理解への新しいアプローチ」、安西祐一

- 郎 他 (編) 『認知科学ハンドブック』、東京: 共立出版: 453-465.
- 坂原茂 (2001) 「メンタル・スペース理論」 in 辻幸夫 (編) (2001): 316-332.
- Sakai, Tomohiro (2012) L'énigme des énonces d'identité de type « a=b »: Une solution grammaticale, 『フランス語フランス文学研究』 101: 23-37.
- 酒井智宏 (2013) 「認知言語学と哲学—言語は誰の何に対する認識の反映か—」 『言語研究』 144: 55-81.
- 白井賢一郎 (1991) 『自然言語の意味論—モンタギューから「状況」への展開』、東京: 産業図書
- 杉本孝司 (1998) 『意味論 2—認知意味論—』 東京: くろしお出版
- 辻幸夫 (編) (2001) 『ことばの認知科学事典』 東京: 大修館書店.
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 東京: 研究社.
- Ungerer, Friedrich and Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*, London: Longman. 池上嘉彦 他 (訳) 『認知言語学入門』 東京: 大修館書店、1998 年.
- 山口裕之 (2005) 『人間科学の哲学: 自由と創造性はどこへいくのか』 東京: 勁草書房.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 柚原一郎 (2014) 「認知言語学者がこのままではいけないわけ」 『フランス語学研究』 48: 132-133.
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*, Oxford: Basil Blackwell. 藤本隆志 (訳) 『哲学探究』 (『ウィトゲンシュタイン全集』 8)、東京: 大修館書店、1976 年.

Mental Space Theory and Cognitive Linguistics

Sakai Tomohiro

Keywords: Mental Space Theory, Cognitive Linguistics, definition, explanation, cognitive construction

Abstract

The purpose of this paper is to identify the reasons why Mental Space Theory has only a marginal status within Cognitive Linguistic framework, or even dismissed as non-cognitive. The reasons identified are the following: (i) Mental Space Theory focuses on how mental space configurations work in the interpretation of natural language, rather than on how language directly reflects our cognition. (ii) Theoretical tools used to account for linguistic phenomena are not clearly defined, and the attempt to define them necessarily fails, due to their ambivalent nature. (iii) As, contrary to what Mental Space Theory claims, our understanding of natural language is smuggled into the characterization of mental spaces, the latter is not in a position to account for the former. This sloppy nature of the Mental Space Theoretic account, as seen in (i-iii), places the framework very far from the standard Cognitive Linguistics, where linguistic phenomena are accounted for in terms of the functioning of our cognitive system well understood.

(さかい・ともひろ 早稲田大学)